

中・高合同の創作ダンス作品づくりを通して ——第22回全国創作舞踊研究発表会参加の取り組み報告——

由利 直子・世羅 晶子

本校における保健体育科の授業は、中・高各学年に週3時間をベースとして時間割りに組まれている。そのうち、創作ダンスの授業は中学2年生から高校Ⅲ年生までの女子生徒を対象として年間カリキュラムの中に位置づけている。これは、『創作ダンス』の継続的学習の必要性和教育的意義の大きさを指導者が確信していることである。

しかし、教育改革により週五日制が導入されたことや総合学習・情報教育といった新たな分野の授業時間確保が必要になったことから、体育授業のカリキュラムにおいて取り扱う単元やその内容の編成を再構築しなければならなくなった。これに付随して、創作ダンスの授業展開についても大きな変革と工夫が求められることとなった。

本稿では、第22回全国創作舞踊研究発表会に参加するまでの生徒の活動状況を報告し、創作ダンスにおいて中・高一貫のメリットを生かした授業カリキュラムの編成を考える第一歩としたい。

I はじめに

物をじっくり観る・触れる・感じる機会が少なくなってきた中・高生に対し、創作ダンスの作品づくりを通して感じる心を育て、それを体を使って表現できる力を養うことは新指導要領のねらいとする「心の教育」の核ともなる取り組みであると考えられる。

しかし、実際には、保健体育における授業時間数の削減、また、創作ダンス以外の単元との絡みなどから授業時間数や活動場所の調整も大変難しくなっており、創作ダンスの授業で生徒自らの力により、体内から沸き起こるような感性を芽生えさせ、育むにはゆとりのない授業を展開してしまう現状がある。

そこで、創作ダンスを総合学習の観点から捉え、いろいろなものに触れる機会をもっと積極的に設けながらダンスの授業にリンクさせていくことはできないものかと考えた。さらに、本校の中・高一貫教育のメリットを生かし、高校生が創作した動きを作品として構成し、それを中学生に教える取り組みを通して、自分たちの思いを伝える喜びと共感する楽しさ、そして作品を生み出す充実感を味わえたいと考えた。

本稿は、2002年12月22日(日)・23日(月)に開催された第22回全国創作舞踊研究発表会(日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 広島大学教育

学研究科主催)の特別プログラムとして、出品した作品の創作過程を報告するものとする。今回の参加は中・高生有志による作品づくりであった。この取り組みをきっかけとして、中・高一貫の創作ダンスの授業カリキュラムを構想していきたいと考えている。

II 作品のテーマ設定

第22回全国創作舞踊研究発表会の特別プログラムへの参加について、広島大学より『平和』をテーマに作品を作ってほしいとの要請があった。これを受け、まず高校Ⅰ年生に作品づくりの主旨を説明し参加希望者を募った。すると、4名の生徒が作品づくりに関わりたいと申し出てくれた。また、作品づくりは無理だが踊り手として参加したいという生徒も数名現われた。とりあえず作品づくりに関心の高い4名の生徒たちに「自分たちにとって『平和』とはいったい何なのか」を問いかけてみた。この段階では4名の『平和』への意識はまちまちであった。そこで、今回の作品のコンセプトをどこに置くか、誰に何を伝えていくのか考えを絞り込むために、原爆資料館を訪れ、実際に自分たちの五感を使って感じ取ったものを踊りにしようという結論に至った。

<原爆資料館見学の記録>

日時;2002年11月9日(土)10:30~

参加者;高等学校 第Ⅰ学年 3名

小坂 貴子 新宮 清香

山本ゆりえ

Producing a Work of Creative Dance

—— A Collaborative Project by Junior and Senior High School Students ——

Naoko YURI, Akiko SERA

教 員

由利 直子

当日は生徒1名が都合により不参加となったので4人でピースクラブ会員の方の説明を受けながら館内を学習してまわった。

約2時間の学習の後、沸き上がる感動が冷めぬうちに3名の生徒から感想を聞いた。その中で3名に共通してでてきた思いは「こんなに知らないことがあるんだ。今まで自分の中にあった知識が今回結びついた。広島に暮らす私たちがみんなに伝えなきゃいけないことがたくさんある。今回のダンス発表をきっかけにもっと多くの人たちに問題を投げかけていきたい。」であった。

そこでダンスを創作していくキーワードとして、『知らない・気づいてほしい』を掲げた。具体的には、①被爆した人たちがなぜ水を飲んで死んでしまったのか、②爆風により建物の壁や物品がいろいろな方向に歪みが起こっているが、投下直後、広島に何が起こったのか、③核の脅威は現在にも存在する問題。どんな風に私たちの生活に忍び寄っているのか、④広島が原爆投下選ばれた理由と広島の川や木々が物語っているものは何なのかという4点をモチーフにして作品づくりに取り組んでいくこととなった。最終的に作品テーマも『気づいてほしいこと』に決定した。

Ⅲ 作品づくりの経過

- 10月2日(水) 高I授業 全国創作舞踊研究
発表会の主旨説明と参加者募集
- 11月9日(土) 高I有志による原爆資料館へ学習
15日(金) 中学生に舞踊研究発表会の主旨
説明と参加者募集。
- 18日(月) 高I授業 身体育成
} (第1課程を中心に)
22日(金) (3時間)
- 25日(月) 高I授業 4つのイメージ音
} 楽から一つを選択。
- 12月11日(水) (8時間) グループ毎に約1分
間の小作品づくり。
- 7日(土) 広島大学にて伴奏音楽編集。
- 6日(金) 2学期期末試験のため、活動作業
} 中断。
- 16日(月)
- 17日(火) 毎日1時間半の全体練習。
}
- 22日(日)
- 23日(月) 広島県民文化センターにて本番。

Ⅳ 高I 授業展開の実際

(1) 全国創作舞踊研究発表会の主旨説明と参加者募集について(1時間)

- ・ 全国創作舞踊研究発表会とは
- ・ 『平和』を大テーマとして作品を発表することを説明。
- ・ 作品づくり、練習、本番当日など今後の予定を説明し、作品のモチーフづくりに関与してくれる生徒と踊り手として発表会に参加してくれる生徒を募集。

<授業後の手応え>

塾やクラブ活動など多方面にわたってスケジュールのつまった生徒たちにとって、その活動そのものには賛同するものの実際に参加することは大変難しいという状況がある。ましてや、創作ダンスの経験がない生徒にとっては活動内容についても全く想像がつかず参加をためらうものとなった。そこで、中学時代に『ひろしまダンスフェスティバル』(広島県女子体育連盟主催)に参加経験を持つ生徒10人にまず個人的に声をかけてみた。すると内4人から「参加したい。」との返事がかえってきた。ある程度、作品づくりの手順を理解している生徒たちが参加することにより、後日訪れた原爆資料館においても大変意識の高い学習会を展開することにつながった。

また、今回参加できない生徒たちからも創作ダンスに対する興味・関心の強さが感じられたので、モチーフの参考となる動きづくりの面から、授業の中にうまく組み込めたらとの思いを強くした。

(2) 身体育成(3時間)について

- ・ 身体育成法 第一課程

<授業後の手応え>

指導者が学生時代に学習した舞踊の身体育成法を生徒たちに教える形で展開した。指導者の学習不足から大変古めかしいピアノ伴奏に合わせての運動となったことを反省する。が、運動要素のポイントについては十分理解できているおかげで、生徒にポイントを的確に指摘しながらできたことはよかった。

生徒たちの創作ダンスに対する興味・関心の強さはこのような授業参加の態度からも感じる事ができた。特に、体育祭のマスゲームやチアリーディングなどの活動経験者にとっては、その活動中の習った動きとも結びつけながら楽しく学習できたようである。

(3) 小作品づくり(8時間)について

- ・ 有志生徒たちが思い描いたイメージを参考にしながら即興音楽効果音全集の中から4曲選択。選択した効果音は環境音楽とある以下の4曲。

- (a) 氷の世界 (b) ファンタジー
(c) 安らぎ (d) 暗黒の闇

・ それぞれの効果音を聞いた後、感じたイメージをすぐにメモさせながら4つのイメージの中からイメージがどんどん膨らんでいきそうなもの一つを選び、4つの集団を形成。

(各集団毎にデッキとその効果音テープを配布)

- ・ それぞれの集団の中で各自のイメージを紹介しあいながら、共通のイメージを持った人同士で6人以下のグループを構成。
- ・ 各イメージテープを繰り返し流し続ける中で話し合いをしながら、約1分間程度の小作品にまとめる。
- ・ バレーコートぐらいの空間で各グループ毎に順に作品発表を行う。
- ・ 中間発表の段階では、全くステージ正面の意識はなし。イメージにあった動きが発見できているかどうかを評価ポイントとして提示した。
- ・ 中間発表後、観客を意識した運動の方向性や他のグループとの位置関係を工夫するよう指示。
- ・ 最終発表会の段階では、自分たちの感じたことや思いを他の人たちにきちんと伝える工夫ができているかどうかを評価ポイントとした。

<授業後の手応え>

今回のグルーピングは、同じイメージを持つ生徒たちをクラスの枠を取り払って自由に行なわせた。自分自身がより強くイメージを持った作品づくりに取り組めること、グループメンバーが既に共通のイメージを持っているところからの出発であったことから、各自が積極的に作品づくりに参加することができたようであった。また、小グループの活動であったこととイメージが途切れないように音楽が常に流れている状態をつくったことが、各人の集中力を継続しやすい環境づくりにもつながったようだ。

さらに、評価ポイントが作品づくりの段階から明確に指示されていた点が、生徒たちの活動内容をよりはっきりと認識させることになったと思われる。

V 発表会に出品した作品づくりの経過

(1) 作品構成について

(作品時間；5分56秒)

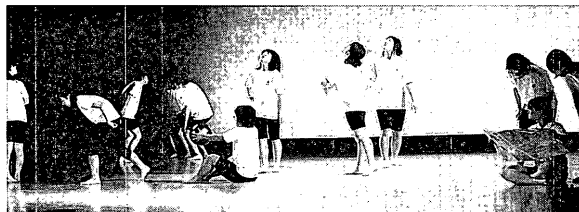
(a) プロローグ；原爆投下前 (担当 新宮清香)

<動きのモチーフ>

8月6日(日)休日の朝に普段と変わらぬ生活をしてきた広島の人々ってどんな生活をしていたんだろう。広島を街ってどんな感じだったんだろう。

朝8時15分、雲の切れ間から突然ピカッという

光とともに世界が変わる。何が起こったのか全く理解できないまま、逃げる余裕さえなかった突然の出来事。熱風と爆風に吹き飛ばされる人々の様子。



(b) 第1場面；原爆投下後

(担当 新宮清香・小坂貴子・山本ゆりえ)

<動きのモチーフ>

真っ赤に燃え盛る街の中を全身火傷を負った人たちが水を求めて川へと集まる。足を引きずりながら、なぜ皮膚がただれてしまったのかわからぬまま、水を求めて這いながら川へと集まる。

水辺に辿り着いた人々は、やっとの思いで口にした水のおいしさに安堵する。苦しみからやっとの思いで得たこの安堵感から息絶える人が続出。

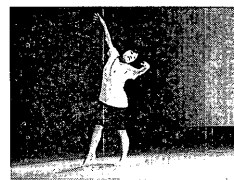


亡くなった人々の本当の理由はこのホッとできた気の緩みからだという。この至福の表情を表現し、作品を観た人に「なぜあんな笑顔で倒れていくのか。」と疑問を感じてもらいたい。

(c) 第2場面；木々の芽生えと何も知らない現代の子どもたち (担当 山本ゆりえ)

<動きのモチーフ>

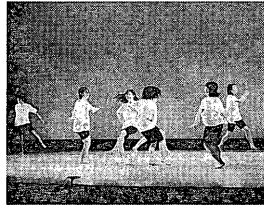
原爆で亡くなった人たちの死骸を養分にしながら、再び力強く芽吹き、大地に根を張り、そして枝を伸ばしていく木々たち。



負けないぞという自然の力の偉大さを感じさせる『広島地』を象徴するものとして表現したい。

そんな半世紀前の出来事など全く知らないで元気に明るくはしゃいで遊ぶ子どもたち。現在の見せかけの平和な社会の中で迫りくる危険に気付くこともなく暮らす人々。

私たちが住んでいる現代社会って本当に平和と言えるのかを訴えかけられるように、第1場面とは対照的な場面として表現してみたい。



(d) 第3場面；核の脅威（担当 小坂貴子）

<動きのモチーフ>

無邪気に遊ぶ子どもたちの背後から迫りくる恐怖。誰にも知られることなく着々と核ミサイルは照準を合わせ設置されている。核を持たないというだけで日本は本当に平和と言えるのか。他国に設置されている核ミサイルの的になっている事実を忘れてはいけない。

コンピュータで制御されている発射指令のボタンは操作一つでまた50年前のあの暗黒の世界に引き戻してしまう程の脅威をもっていることを私たちは忘れてはならない。

知らないこと、気付いていないこと、危険であることを知らされないまま作業させられていること、等のやりきれない思いをこめながら、目に見えない迫りくる脅威を表現したい。



<作品創作中の手応え>

それぞれの場面の担当者に動きのモチーフを考えてもらい、それを中学生や踊り手として参加する高校生を実際に動かしながら作品として組み立てていった。

この際特に注意したことは、踊り手となる生徒たちにそれぞれのモチーフに込められた思いを説明し、十分に理解してもらいながら踊りを完成させていった点であった。

創作ダンスの経験がない中学生や高校生の様子を見てみると踊りに込められた思いを理解する前と後とでは一人ひとりの動きに雲泥の差が現われた。さらに、作品を創作していく過程で、踊り手一人ひとりが積極的に動きを作り出していったり、感情表現にも個性が現われてきて、この作品に対する思い入れとそれを表現する力を習得していったと感じた。

(2) 参加生徒について（中；12，高；9，計；21）

中学校 1年生（6名）

池田 舞子 斧 真智子

木村 日夏留 古谷 ゆう子
高垣 陽子 日野 愛友美
2年生（6名）

池田 千穂 岡田 恵
柴田 愛花 玉上 詩織
平野 聡子 古霜 佳奈

高等学校I年生（9名）

内木 里美 小坂 貴子
新宮 清香 神野 夕希子
隅井 麻美子 玉本 聖佳
濱田 真裕子 前田 南
山本 ゆりえ

* 当日、クラブの試合と重なり不参加となったが空間構成や動きのアドバイザーとして、高校I年の大世渡麻子さんも関与してくれた。

(3) 伴奏音楽と衣装について

校内の学期末テストが発表会一週間前まで実施されていたこととミキシング作業や衣装の準備の為に広島大学まで行かなければならなかったことから、生徒にはイメージする音楽をいくつかピックアップさせるにとどめ、伴音の編集作業と衣装探しは教員二人で行なうこととなった。

しかし、生徒たちの表現したい内容に合致する音の素材や生徒の体格にあう衣装はなかなかみつからずかなり頭を悩ませた。が、結局いろいろ悩むだけの時間もない状態であったことから、衣装も音楽もとてもシンプルなものに納まった。

実際は以下のとおり。

衣 装；白のTシャツと黒のスパッツ

ただし、第3部の『核の脅威』時に黒のタートルセーターを上から着用。

伴奏音楽；効果音（KING TWIN BEST SERIES）

KICW 8143～4 DISC 1の78柱時計

Thinking of you/ Kitaro 喜多郎

CCCN-21001 Spirit of Water

(4) アナウンス原稿について

no more Hiroshima
それは事実を知ることから始まる
この作品づくりの中で、知らないことが
いっぱいあることに気がきました。
なぜヒロシマに落されたの？
なぜ水を飲んだら死んでしまうの？
核ミサイルのボタンは誰が押すの？
そんな疑問から、この作品は生まれました
みなさんにも ヒロシマ について
知ってほしい
そういう思いをこめて作りました

(5) 照明案について

本番当日までどのような照明を付けたら良いのか悩み続け、結局リハーサルを見て篠本照明の方に要望を出しながらの作業となった。結局、時間の余裕もなかったため、全面任せる形で本番にのぞんだ。

生徒の感想にも照明のすばらしい効果について語られたものが多く見受けられ、プロの方のすごさを思い知らされた。

表現したい動きを上手に引き出してくれる照明のあて方や色使いなど、その使用技術については生徒よりもまず指導者側の学習が必要であることを痛感した。

(6) 指導者の役割分担について

本校のダンスの授業はティーム・ティーチングの形態をとっている。今回の取り組みについても以下のように役割を分担して行った。

全体指導；由 利

- ・ 高I授業チームリーダー
- ・ 作品の構成について助言
- ・ 生徒への技術指導

* 主として中学生への連絡窓口

庶務関係；世 羅

- ・ 練習時間や場所の調整
- ・ 大会参加に関する書類作成
- ・ 教官や保護者への諸連絡と手続き

* 主として高校生への連絡窓口

VI 発表会に参加して

(1) 初めて『創作ダンス』に携わった生徒たちの練習段階での思い

- ・ ダンスはみんなでわいわい踊るのかと思っていましたが、劇みたいな感じだったのでちょっとびっくりした。
- ・ 最初は恥ずかしくてやりにくかった。
- ・ ステージをほふく前進したり転がったりする動きは嫌だなと思った。
- ・ 初めてのことだらけでただ無我夢中に一生懸命やるだけだった。数を重ねるうちに内容は高度になるばかり。体中にあざができて痛かった。等（これまでになかった動きへの戸惑いや辛い場面もかなりあったようである。）

(2) 発表会後の『創作ダンス』への思い

- ・ 何度も何度も同じ所を練習して『大成功』した時は本当にうれしかった。
- ・ 伝えたいことがはっきりしていると気持ちが込めやすいことがわかった。
- ・ 何もかも初めてのことで大変だったけど最後までやってよかった。

- ・ 創作ダンスはあんまりやりたくなかったけど、最後の方では楽しかった。
- ・ みんなが一致団結して演技できたことですごく達成感があるし、充実して過ごせた。
- ・ 普段使わないような筋肉を使って、筋力がついた。何よりみんなで楽しめたことがよかった。（どの生徒たちからも発表を終えた満足感があふれている。）

(3) 作品の内容について

- ・ 表現することの難しさと人に見ていただくことの楽しさ、大変さなど言い尽せない程たくさんの方があってとても良い作品になったと思う。
- ・ 自分たちの作品をビデオで見たらすごく恐くって、訴えたいものが見えた気がした。（指導者が一番伝えたかった『自分の思いを体で表現する楽しさ』を十分体感できていることがうれしい。）

(4) 作品づくりを通して

- ・ このダンスに参加して、広島に住んでいても知らないことがたくさんあることが分かった。
- ・ 今まで知らなかったことを知ることができ、原爆の悲惨さが改めて分かった。
- ・ 人に伝えようと練習してきたけど、実は「本当の平和」「平和って何？」ということをも自分自身が一番考えさせられたし学んだと思う。
- ・ 戦争について、平和について学習はしていたけど、現在のミサイルの問題等については考えさせられるものがあった。
- ・ 自分の身近にある命の危険を私たちはどれだけ切り抜けていけるのか、残された問題についてこれから考えていきたい。
- ・ 火傷した人たちが水を飲んで死ぬのは生理的なものではなく、精神的なものが原因だったことはダンスに出るまで知らなかったのでも、事実を知るうえでも参加してよかった。
- ・ 代表者の人たちが原爆を落された時起こったことや、これから伝えたいことなどをたくさん調べて教えてくれたことがすごいなあと思った。（これらの感想から、今回の取り組みは保健体育の域を越え、平和教育への足掛かりともなる学習であり総合的な学習へと展開されているものと評価できる。）

(5) 中・高合同での大会参加について

- （中学生がこのような辛い経験をしながらも途中で投げ出すことなく取り組み、ダンスの楽しさと発表することの達成感を味わえた背景には高校生との合同活動であったことが大きな要因となっている。）

- ・ 12月初旬に高校の先輩からお誘いを受け練習が始まった。先輩に直接教えてもらえてだんだん恥ずかしさもなくなっていった。
 - ・ ステージの上で踊るなんて、こんな経験はなかなかできないと思うので参加できてよかった。ましてや高校生といっしょに踊れるなんて。
 - ・ 普段あまり交流のない高校生の先輩方とこの創作ダンスで一つになれた感じがした。
 - ・ 高校生となかなか接することがないので、こうして触れ合うことができてためになった。
 - ・ 全体の仕上がりにては、中学生とも高校生とも息があってとても良い作品になったと思う。
 - ・ 普段は全く関わることのない中学生と仲良くなれたし、和気あいあいとしていて学校に行くのが楽しかった。
 - ・ 高校生の先輩方がどんな思いを込めた動きなのか話しながら丁寧に教えてくれたので、自分なりの思いを込めながら踊ることができた。
 - ・ 代表者の人たちが一生懸命伝えたいことを教えてくれて、自分たちも理解できたからすごく満足いく結果になったと思う。
- (中学生の高校生に対する尊敬と憧れのようなものはとても強い。ダンスの授業を展開する際、恥ずかしさを取り除き、夢中になって踊れる場の設定は大変難しいものだが、今回はこの部分の扱いがとても自然に解消できている。異学年が関わりあいながらの授業形態を考えるきっかけとなるかもしれない。)

☆ この度の一連の取り組みについて、最初から積極的に参加意志を示し、事前の平和学習、作品のテーマ決定から動きのモチーフづくり全てにおいてリーダー的存在となって動いてくれた代表生徒の感想文を掲載しておく。

『 去年のダンスフェスティバルの結果がとても悔しくて、今回の作品は絶対いいものにしてやると意気込んでいた。

与えられたテーマが「ヒロシマ」だと聞き、広島に住んでいる者として一番伝えたいことは何かを探す作業から始めた。原爆資料館に行き、広島に原爆が落されることになった経緯から現在世界中に存在する核兵器についてまで、いろいろな話を聞いた。そこでダンスを作るのは初心者私たちだけ、何を表現したいのかをとにかく絞り込んでいった。実際、この作業が一番時間がかかったし、一つの作品を作り上げるためにここまで深く考えたことは今までなかった。

観客の皆さんに知ってほしいことを訴えようと一生懸命練習し、思いを込めて踊ったが、本当は

私たち自身が一番いろいろなことを学ぶことができたんじゃないかなと思った。

発表後にみんなが「またやりたい。」と言ってくれてすごく嬉しかった。高校生の友だちだけでなく、後輩である中学生たちに私たちの思いやダンスの楽しさを継承できたことが嬉しかった。

今回のダンスで人に伝える快感と伝わる喜びを知ったのでぜひ次へ挑戦する力に生かしたい。』

Ⅶ 成果と課題

「平和」という大きなテーマにどう取り組んでいくか、どこから斬り込んでいくか。この問題を解決してくれたのは、やはり自分たちが学ぶことであった。

自分たちの訴えたいことをまとめ、いかにして相手に伝えるかをまず明らかにする作業から行うことにより、方向性が明らかになり、共通認識をもって作品づくりを進めることができたのではないかと考える。

「知らない・気づいてほしい」をキーワードに進めていったが、私が難しさを感じたのはモチーフの運動化をただの描写ではなく、効果的に印象づけるために動きをいかに創造していくかというところであった。

最終的には生徒の思いを聞き、それぞれの場面でどういう気持ちを込めるのかを確認しながら作り上げていったが、この作業はとても大切であると感じた。

動きに込められた意味を全員が知ることで、各人がその踊りに対してより感情を注ぎ込むことができたように感じた。

今回の作品づくりは、高校生が自分の身体をどのように動かせば表現できるのかを悩みぬいてできたものだと感じている。また、その思いを中学生が感じ取り、一緒に力強く表現できたのではないか。学年を越えてお互いの良さを感じあい、生かし合いながらできたことが一番の成果であり、ダンスのような創作活動に興味を持ち、楽しむことができたことは、これから生涯にわたって生きていくと確信している。(世羅)

この度の創作ダンスの取り組みは、広島大学から附属中・高等学校に出演依頼を受け、動き出してからわずか2ヵ月間のものである。

この期間中に指導者側が生徒たちに仕掛けたものは2点に絞られる。一つは、集団をひっぱる核となる人物、特にここでは表現したいものをみんなに言葉で伝えることができるリーダーの育成。そしてもう一つは、一人ひとりの思いをみんなで見えさせる

仲間づくりであった。

私は、今回の高等学校I年生の授業において、自分が心に感じたものを体を使って表現することの楽しさ、自分だけの感覚だったものをみんなと共感し共有しあうことの楽しさを伝えたいと思いながら学習計画を立てた。さらに、今回の大きな大会への参加を良い機会と捉え、ダンスの授業で生まれ出てきた動きをさらに発展させながら作品のモチーフとして取りいれていければ、とも思い描いた。

しかし、実際には今回の授業展開や大会参加は、作品創作にかかる時間的制約から考えるとかなり無謀な挑戦であったことは明らかである。作品づくりに関わった生徒たちにとっても、中・高合同の取り組みは先が全く予想できない状態で自分たちがみんなをリードしていけるかどうか、不安はとても大きかったはずだ。かくいう私自身も、全国の大学のそれを専門とする創作舞踊研究会の特別プログラムとして作品を発表するというで内心生徒以上に重圧を感じていたのだから。

この研究の出発点がゆとりある授業展開をめざしていたことから考えると、この取り組みは逆行しているようにも思える部分もある。しかし、創作ダンスがどのようなものか全く知らない中学生が高校生と一緒に活動することで、心身ともに大きな成長を遂げることができたことは大きな成果である。

また、高校の授業内容を作品のモチーフとリンクさせたことで、大会に参加した生徒たちは単に参

加者間だけの満足感に終わることなく、参加できなかった他の友達とも喜びや満足感を共有しあえたことも評価できる。
(由利)

VIII ま と め

心身共に大きな変動がおこる思春期時代にある中・高校生にとって、今回のような「心」を育む教育はとても大切なものであると確信している。

また、中学生と高校生が合同で作品づくりに取り組んだことで、高校生は表現したい内容を人に言葉や動きで伝えることの難しさと喜びを感じ取ることができたし、中学生はダンス授業の導入段階で抱えている「恥ずかしさ」からの脱却をととてもスムーズに行なうことができた。

創作ダンスの授業を展開するとき、多くの指導者が生徒たちが示す「恥ずかしい」という感覚をどのようにしてなくしていくか、心を開放できる環境をどう設定していくかに頭を悩ませている。この課題が高校生と中学生のような年齢差のある生徒たちが交流し関わり合いをもつことで新たな展開を見せようとしている。

今回の取り組みは、中学生も高校生も有志という特別なケースではあるが、心と体を一体として捉えようとする教育課題を解決する創作ダンスの指導法として、新たな授業展開の可能性を大きく感じた取り組みとなった。

